主日礼拝説教 「愛する子よ！」

日本基督教団石神井教会　2018年1月14日

【旧約聖書日課】出エジプト記　14章15～22節

15主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命
じて出発させなさい。16杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けな
さい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。17しかし、
わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼らはお前たちの後を追って来る。その
とき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。18わたしがファラ
オとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知
るようになる。」

19イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを行き、
彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、20エジプトの陣とイスラエルの陣との間
に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくこ
とはなかった。21モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風を
もって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。22イスラエルの人々
は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。23エジプト軍
は彼らを追い、ファラオの馬、戦車、騎兵がことごとく彼らに従って海の中に入って来た。
24朝の見張りのころ、主は火と雲の柱からエジプト軍を見下ろし、エジプト軍をかき乱さ
れた。25戦車の車輪をはずし、進みにくくされた。エジプト人は言った。「イスラエルの
前から退却しよう。主が彼らのためにエジプトと戦っておられる。」

26主はモーセに言われた。「海に向かって手を差し伸べなさい。水がエジプト軍の上に、
戦車、騎兵の上に流れ返るであろう。」27モーセが手を海に向かって差し伸べると、夜が
明ける前に海は元の場所へ流れ返った。エジプト軍は水の流れに逆らって逃げたが、主は
彼らを海の中に投げ込まれた。28水は元に戻り、戦車と騎兵、彼らの後を追って海に入っ
たファラオの全軍を覆い、一人も残らなかった。29イスラエルの人々は海の中の乾いた所
を進んだが、そのとき、水は彼らの右と左に壁となった。30主はこうして、その日、イス
ラエルをエジプト人の手から救われた。イスラエルはエジプト人が海辺で死んでいるのを
見た。31イスラエルは、主がエジプト人に行われた大いなる御業を見た。民は主を畏れ、
主とその僕モーセを信じた。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一　5章6～9節

6この方は、水と血を通って来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水
と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理
だからです。7証しするのは三者で、8“霊”と水と血です。この三者は一致しています。9わ
たしたちが人の証しを受け入れるのであれば、神の証しは更にまさっています。神が御子
についてなさった証し、これが神の証しだからです。

【福音書日課】マルコによる福音書　1章9～11節

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受け
られた。10水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るの
を、御覧になった。11すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」とい
う声が、天から聞こえた。

洗礼から始まる歩み

新年もすでに第二週の日曜日を迎え、教会も、次の教会暦の大きな節目、イースター（復活祭）に向けて歩み出すときとなりました。教会の暦は、ごく初期の時代に主のご復活を記念し祝うことから始まり、整えられてきました。主のご復活の祝いが整えられるに従って、最初の時代には特に時を定めずに執り行われていた洗礼式も、その祝いの中に組み込まれるようになったようです。その古代教会の習慣に倣って、現代でも多くの教会が、洗礼式をイースターの祝いの時期に集中して執り行うようにしています。わたしたちも、来るイースターの祝いのときに洗礼の恵みにあずかる新しい弟子、新しい信仰者が誕生することを、祈り求めたいのです。

今日の福音書日課は、主イエスの洗礼の出来事を伝える箇所です。福音書は、主イエスがおよそ 30 歳で宣教活動を始められたことを、まず、この洗礼の出来事から物語り始めます。「ここからすべてが始まった」と、福音書は語り始めるのです。洗礼から、すべてが始まりました。そして、洗礼から始まって、あの、わたしたちが教会堂の屋根や礼拝堂に掲げている十字架にまで、主イエスの歩みは、至られたのです。今日の使徒書日課・ヨハネの手紙一に「**水と血を通って来られた方、イエス・キリスト**」という表現がありました。それは、まさにそのご生涯の初めと終わり、洗礼の水と十字架の血を指して、これこそ主イエスが何者でいらっしゃるのかを示すものだと言おうとしているのでしょう。

主イエスの弟子たちは、自分たちが従うことになった主イエスのご生涯を、そのように物語りました。そして、その主イエスの歩まれた後に自分たちも続こうとしたのです。主イエスを直接知らない、後から来る弟子たちにも、この同じ道を従って来るようにと、主のご生涯の物語を、語り継ぐようになりました。その物語を受け継いだ教会で、わたしたちは、主イエスに従っていく歩みの初めに、まず、主イエスがお受けになられたのと同じ洗礼を受けるようにと、教えられてきたのです。わたしたちの主の弟子としての歩みも、洗礼から始まるのです。

もっとも、だからと言って、教会は、すべての人が洗礼を受けるべきだと主張しているわけではありません。洗礼を救いの必須条件のように言う人もいますが、そうとは言えないでしょう。使徒パウロは、「**召使が立つのも倒れるのも、その主人によるのです**」（ローマ 14:4）とたとえて、一人ひとりには神がお決めになられた救いの道筋があるのだから、他の者が「こうすべきだ」とか「ああすべきだ」などと言うべきではない、ただ、各自が自分の心の確信に基づいて、神に感謝して、それぞれの大切にすることを行うべきだと、教えています。ですから、わたしたち自身は、教会で洗礼を受けることを大切にしますが、そうではない道へと導かれた信仰のあり方もあるのだろうと思います。

そうであるからこそ、わたしたち教会は、むしろ、洗礼のことを変に隠すようなことはすべきではないと思います。教会は、洗礼から始まり十字架に至るという主イエスの物語を受け継ぎ、そこにこそわたしたちが従って行く道があると信じている信仰者の群れだからです。

「あなたはわたしの愛する子」

わたしたちは、まだ洗礼を受けていらっしゃらない皆さんや、家族や隣人を、一所懸命に洗礼へとお招きします。それは、わたしたちと共に主イエスに従う者として生きて欲しいからです。この道を共に生きる群れに加わっていただきたいからです。けれども、実は、もっと根本的なことがあります。洗礼そのものに込められた、根本的なこと。そのことを知っていただきたいのです。主イエスが洗礼を受けられたときに天から告げられたあの言葉、「あなたは神の愛する子、神の子です」ということを知っていただきたいのです。それが喜びであることを知っていただきたいのです。

「自分は、親に愛されて育った」と語ることのできる人、「自分は、この親の子です」と誇りをもって言える人は、何と幸いなことかと思います。でも、それ以上に幸いなのは、「自分は、神に愛され生かされている」と語ることのできる人ではないでしょうか。「自分は、神の子どもです」と誇りをもって言える人ではないでしょうか。どんなに素晴らしい親でも、人間の親には、限界があります。けれども、神は、人間の中で最高の親よりも、なおはるかに優った「真の親」「真の父」となってくださるのです。元来、神とは、そういう方でいらっしゃるのです。人間の一人ひとりを「我が子」として限度を知らずに愛し、生かし、育み、その人生をその子にふさわしく全うさせようと、あらゆる手だてを尽くしてくださっている。そういう「天の父」を、しかし、人間は、ちゃんと知らずにいたのでしょう。それを、主イエスは、ご自身の洗礼の出来事の中で、はっきりとさせてくださったのです。

わたしたちは皆、洗礼へと導かれて、その恵みにあずかるときに、「あなたは、神の愛する子です」「あなたは、神に愛されています」という宣言を、神からいただいているのです。洗礼を受けることを通して、わたしたちは皆、「自分は、神に愛され、生かされているのだ」と確かめる言葉を与えられているのです。「自分は、神の子なのだ」という自覚を持つように促され、励まされているのです。

それにしても、洗礼に至るには大きな壁があることも確かです。明らかに洗礼を拒んでいるわけではないのに、どういうわけか洗礼に至らずに長い年月を過ごしていらっしゃる方が少なからずあります。洗礼を、本人が到達するものとして考えている限り、そうなってしまうのかもしれません。しかし、洗礼は、本人の決心とか、理解の到達によって至るわけではないのです。むしろ、わたしたちが、自分の手でどうにかしようとしていたことを手放して、神が為してくださることに委ねることをした、その一瞬の隙をつくようにして、洗礼はわたしたちの中に入り込み、授けられることになったのではなかったでしょうか。

主イエスが洗礼を受けられた、そのとき、**天が裂けて、霊が鳩のように…降って来**ました。神が、塞がっていた道を天から突き破ってくださったのです。人が自力で進もうとして、どうしてもその道が塞がれていて、先に進めないでいる。だからこそ、主イエスは、塞がれていた道を神が突き破ってくださることを、その洗礼の出来事でお示しくださったのです。

「愛する子よ、水の中へ！」

わたしたちは皆、主イエスと同じ洗礼の出来事にあずからせていただきました。神が突き破ってくださった道を、主イエスにお導きいただき、進ませていただこうと、主と同じ洗礼にあずからせていただいたのです。いや、洗礼に至る道さえ、実は、自分で切り拓いた道だったのではなくて、神がすでに切り拓いてくださっている道に導かれてのことだったと思います。気が付いたら、もう、洗礼という出来事の目の前まで、導かれてきていた。あとは、その道を神に導かれてきたという事実を認めて、洗礼の出来事の中に入っていくか、それとも、そこから向きを変えて逆のほうに引き返していくか、どちらかだったのです。結局、わたしたちは皆、幸いにも、洗礼の出来事の中に入らせていただきました。

旧約聖書日課・出エジプトの物語は、モーセに率いられたイスラエルの民が、エジプト軍の追っ手から逃れながら、海を渡っていく場面です。この海を渡っていく場面は、初代教会の時代以来、洗礼の意味を示す故事の一つとして覚えられてきました。海が二つに割れて、その間を渡っていくのですが、このとき、イスラエルの民は、海の中、水の中をくぐっていったのだと考えるのです。イスラエルの民は、皆、海を前にして、立ち止まり、右往左往し、前にも後にも進めない状況を嘆き、叫んでいます。まさか、海の間を通り抜けられるなどとは、だれも考えません。ところが、神が命じられたのです。「**イスラエルの人々に命じて出発させなさい**、海の中へ！　水の中へ！」。そして、神が拓いてくださった海の中の道、水の中の道を通り抜けて、エジプト軍の追っ手から逃げ延びたのです。

「海の中へ！　水の中へ！」。わたしは、泳ぎが苦手で、海や川でおぼれかけたことがありますが、そのような者にとって、深い海の中、水の中へ進み入ることは、恐ろしいことです。死を意味することです。けれども、その、ある意味で死を意味する「水の中」を通って、その先にいたる道を、神は、拓いてくださる。イスラエルの民に拓いてくださったように、キリストの洗礼の出来事の中で、わたしたち全ての者のためにも、水の中を通り抜ける道を、拓いてくださっている。それは、洗礼という儀式で終わりの道ではありません。生涯にわたって、いつも、神が新たに拓いていってくださるはずの道です。繰り返し「水の中」を通り抜けて、後ろからまとわりついてくる「エジプト」から逃れさせるための、過去の自分と訣別し続けるための、十字架に至るキリストの道です。「神の子」として生き、「神の民」として成熟していく、そのための道です。

神は、「さあ、この洗礼の水の中へ、進み行きなさい」と促されているのです。「洗礼の水の中へ！」。それは、一つの「死」を意味することです。過去の「死」です。しかし、それは、「誕生」をも意味します。「神の子」としての「誕生」です。「神の子」として新たに生まれる。その営みを共にする群れが、教会です。そこに加えられ、「あなたは神の愛する子」との言葉を繰り返し聞く営みに身を置くことは、幸いなことです。この幸いを本当に幸いなこととして語る言葉を、わたしたちは、得させていただきましょう。神のお示しになる「水の中」へ、ただ主を信頼して進み行く群れとされるよう、祈り求めてまいりましょう。